

優秀賞

今も忘れない「めつきらもつきら」の呪文
す。

中 寛信

拝啓、柳田邦男様、平素のご活躍、心強く思っております。今回の企画のことを知り、反射的に「子ども達が一番好きだった絵本のことを手紙に書こう」と思いました。それは「めつきらもつきらどおんどん」です。発売された時私たちの子どもは六歳、三歳、一歳。最後の子どもが小学校に入ってもまだ読んでいました。最初に買った一冊がバラバラになり二冊目もかなりくたびれましたが今でも本棚にあります。二〇一一年三月の震災の時、母親がライトバンにいったいの絵本を積み被災地に向かいましたがこの絵本だけは残りました。あまりに多くの思い出がつまっていたからで

「遊ぶ友達が誰もいない」という衝撃的な一文から絵本は始まり、ほとんどやけくそのように歌ったでたらめの歌が夢のように楽しい「友達」のいる素敵な世界への入り口を開く呪文だったわけですが、我が子たちは読んでいる時はその出現箇所まで声を揃え、読み終わっても何か別の遊びをしていても、繰り返し繰り返し「あっぺらこの・・・」と合唱していました。二人の弟のどちらかが間違ったり忘れてたりすると長女がえらい勢いで訂正。それを眺める楽しさは格別でした。やがて長女と長男の好みは「エルマーと竜」みたいな字の多い長い物語へ、次男の好みは「かいけつゾロリ」へと移行しますが、夢の世界で夢の友達と会うための呪文は忘れません。

冒頭の「遊ぶ友達が誰もいない。」万が一そういう事態に立ち至っても、現実のこの世界に平行してとてつもない能力を持つ愉快な「友達」がいる世界がある、という絵本の教えはとても貴重だと思います。子どもが忘れなかったのは当然です。

「友達」もかん太を大歓迎しました。かん太は最初、「いやだっ、化け物なんかと遊ぶかいっ」と言っ
てしまいましたが、その際の三人のお化け達の身も世もなく泣き崩れる様が、本当にかわいらしいです。化け物・・とかん太は言いました。三人は確かに異形の存在です。耳のとんがった白塗りのもんもんびやつこ、真つ赤な顔に、牙の覗く大きな口のしっかかもつかか、そして異様に頭部が大きくて長いお宝まんちん。形は怖いが、その人たちが月まで届く縄跳びジャンプをし風呂敷一枚で

空を飛び懐から海のみえるガラス玉を取り出して見せる時、かん太も、もちろん読んでいる子ども達も、目を輝かせその世界に没頭していました。子どもはもう三十四歳、三十一歳、二十九歳になりましたが、今なおこの呪文を唱和できます。たしかにその呪文が入り口を開く「もう一つの世界」は、心の中に息づいているのだと思います。

子ども達は何の問題もなく成長したわけではありません。お風呂の中で漫画を読むな、と注意された長女が金属バットで風呂桶を割ってしまったという事件もありました。でもいつか子どもはしつかりと親の許に帰って来ます。お互いに幸福な記憶があれば。だから、絵本が子どもの、子どもを育てる親の傍らにあるということはとても大事だったのだと思いました。

この夏、数年ぶりに子ども達が帰省、私たち老夫婦は、一歳のお誕生日を迎えた最初の孫に、端っこがすり切れた古いこの絵本を、読んであげる機会を得ました。一歳の子がこの物語に最後まで没入していたのは驚きでした。これほど集中するのなら、ということでも二回目はこの書籍で育った長女が読みました。その時も同じように集中していました。長女はこの一歳の甥に「会うたびに読んであげる」と約束しています。

私たちはこの「めっきらもつきらどおんどん」だけでなく、すべての絵本の力を信じて育て、育ちました。荒川区の図書館の皆様の素敵な取り組み、それを支援され、文化とは何かを不断に語り続けられる柳田邦男先生、すべての皆様のご活躍が、いつまでも、絵本で育つ子どもとその親の傍

らにありますよう、願っております。ありがとうございました。

二〇一八年八月二十四日 中 寛信
柳田邦男様

「柳田邦男先生からのメッセージ」

中さんのおたよりも、「家族の絵本文化」の姿を語るものでした。父親あるいは広く男性からのおたよりが少ないのは、残念なのですが、六十七歳になった中さんのおたよりは、三人の子どもたちが幼かったころ、一冊の絵本「めっきらもつきらどおんどん」をめぐって、いかに家族の絆が楽しく結ばれていたかを、生き生きと書いてくださったので、とても嬉しかったです。

子どもは、意味のないようなものであっても、オノマトペを発音したり、ナンセンス的な言葉の歌を歌ったりするのが好きです。絵本『めつきらもつきらどおんどん』の中で、はじめにかんた少年が歌う「ちんぷくまんぷく あっぺらこのきんぴらこ……」という歌は、どんな子でも魅せられてしまいますね。中さんの子どもたち三人は、この歌を合唱するほどだったし、父親は「それを眺める楽しさは別格でした」というのですから、絵本がいかに家族の心意気とでも言うべきものを盛り上げ、楽しい共通の時間を生み出してくれるかということを示していると言えるでしょう。

絵本の世界はファンタジックな世界なのですが、

単なる絵空事の世界ではなく、それを楽しむ子どもにとっても親（あるいは祖父母）にとっても、今そこにいる現実の自分と心の中では密接に繋がっている世界なのです。それゆえに、絵本の世界での体験は、現実の体験と同じように、読んだ人の心の中に生き生きと刻まれ、まるでやかな人間形の一翼を担うことになることさえ言えるのです。

中さんが、「（はや三〇歳前後になった三人の子どもたちは）今なおこの呪文を唱和できます。たしかにその呪文が入り口を開く『もう一つの世界』は、心の中に息づいているのだと思います」と書いていることは、右記のことを意味していると言えるでしょう。